

- 特集1——対談
「北陸の地域づくりについて」ほか
- 特集2——東日本高速道路(株)新潟支社との
意見交換会
- 特集3——けんせつフェア北陸 in 金沢
- 特集4——女性レポーターによる現場訪問
●片貝別又発電所新設工事



▲ 第18回福島潟自然文化祭のメインイベント「雁迎灯(かんげいび)」。約12,000本のろうソクで、冬の渡り鳥「オオヒシクイ」を表現した。
(右上はボランティア・子供たちによる日没前の点灯風景)

会員各社名

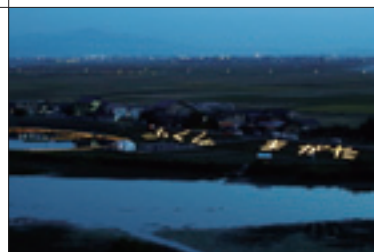
アイサワ工業(株)	オリエンタル白石(株)	大成建設(株)	東洋建設(株)	(株)北都組
青木あすなろ建設(株)	(株)加賀田組	大日本土木(株)	戸田建設(株)	(株)本間組
あおみ建設(株)	鹿島建設(株)	大豊建設(株)	飛島建設(株)	前田建設工業(株)
(株)安藤・間	(株)熊谷組	(株)竹中土木	西松建設(株)	(株)丸山工務所
石黒建設(株)	五洋建設(株)	田辺建設(株)	日特建設(株)	三井住友建設(株)
岩田地崎建設(株)	佐藤工業(株)	鉄建建設(株)	日本国土開発(株)	みらい建設工業(株)
(株)植木組	清水建設(株)	東亜建設工業(株)	(株)福田組	名工建設(株)
(株)大林組	(株)銭高組	東急建設(株)	(株)フジタ	りんかい日産建設(株)
(株)大本組	第一建設工業(株)	東鉄工業(株)	(株)不動テトラ	若築建設(株)
(株)奥村組				



発行 一般社団法人 日本建設業連合会 北陸支部 広報委員会
〒950-0965 新潟市中央区新光町6番地1(興和ビル7F) TEL(025)285-8886
印刷 新潟中央印刷
〒950-1446 新潟市南区庄瀬6541-1 TEL(025)372-1334

平成27年12月10日発行





59 CONTENTS

- 1 VISION
「建設業の担い手確保・育成に向けて」
- 2 随想
「いしかわの成長を支える建設産業の担い手確保・育成」
- 3 特集①
対談
「北陸の地域づくりについて」ほか
- 10 特集②
東日本高速道路㈱新潟支社との意見交換会
- 14 特集③
けんせつフェア北陸 in 金沢
- 17 特集④
女性レポーターによる現場訪問
●片貝別又発電所新設工事
- 21 素敵な女性
「建設コンサルタントで女性の長所を発揮する」
- 22 エッセイ
『何も無かった私から、2015ミス・アース・ジャパンになるまで』
- 23 ゆうたいむす
●「川に寄り添う暮らし」
●「目標に向かって迷走中」
●「年齢不詳」
●「18.44の対決」
- 25 私のプライベートタイム
「転職が育むプライベートタイム」
- 26 事務局だより

表紙の写真：300年前の新潟の盆踊りを復活させた「新潟下駄総踊り」第18回福島潟自然文化祭のイベントでも躍動感ある踊りで観客と一体となって盛り上がりました。

「建設業の担い手確保・育成に向けて」

株式会社大林組
常務執行役員北陸支店長
引田 守
Mamoru Hikita



北陸地域における今年最も大きな出来事は北陸新幹線の開業です。観光客が増大し、特に金沢ではホテルがなかなか取れない状況のようです。

企業が本社機能や生産拠点を北陸に一部移転させる動きも活発になっています。これは東日本大震災以降、災害リスクを分散する動きとして注目されています。北陸地域が首都圏のバックアップ機能を期待されているということであり、建設産業の果たすべき役割も大きいと考えています。

また先日、茨城、栃木、宮城などで堤防が決壊し、甚大な水害が発生しました。お亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災された方々に心よりお見舞いを申し上げます。天候の不順に加え地震・噴火などが頻発しており、このような災害がいつ起こってもおかしくない状況が続くものと思われます。災害に対するインフラの整備は、まだまだ十分とはいえず、計画的な整備が望まれるところです。

建設業界は、一時の人手不足はある程度解消したものの、高齢化の問題は深刻です。国土交通省の推計によれば、10年後の建設業の就労人口数は、約10%減少すると言われています。熟練の技能労働者が次々と引退していく中、災害復旧工事などへの対応は困難な状況になることが予想されます。このような状況に対応していくためには、次世代を担う若者を確保し、育成していくことが重要となります。

弊社大林組におきましては、担い手確保の取り組みとして、昨年「大林組林友会教育訓練校」を設立しました。この教育訓練校は東京都より建設業界で初めて「広域訓練団体」に認定されております。

また、「スーパー職長制度」は、若手技能労働者の意欲向上を目的としており、5年目の取組みとなります。優秀で他の模範となる職長をスーパー職長に認定し、従事日数に応じて一定の手当を支給しています。さらには、昨年より協力会社の採用活動を支援する「大林組林友会合同企業説明会」を開催するなど、様々な活動を実施しております。

女性技能者の活用も重要な課題です。日建連においては、昨年「なでしこ工事チーム」の登録を開始しました。また、『「けんせつ小町」が働きやすい職場環境整備マニュアル』を作成し、積極的な取組を開始したところです。弊社においても、昨年初の女性所長が誕生し、一歩一歩取り組みを進めています。

担い手の確保・育成は建設業の最優先課題です。建設業が若者にとって魅力ある産業となれるよう、業界全体が一体となって今後も取り組みを進めてまいりましょう。



▲教育訓練校での実習状況



「いしかわの成長を支える建設産業の担い手確保・育成」

石川県
土木部長
常田 功二
Kouji Tsuneda



ご承知のとおり、本年3月14日、県民の四十年來の悲願でありました北陸新幹線が金沢まで開業しました。本県ではこれまで、新幹線開業に向けて様々な社会資本整備を着実に進めてきたところであり、北陸新幹線の整備計画が決定された昭和48年の翌年には、いち早く金沢駅付近連続立体交差事業の調査を開始し、昭和53年には事業に着手しました。その後も、金沢駅から近江町市場に至る市街地再開発事業や、金沢駅から金沢港までの駅西地区における区画整理事業、もてなしドームや鼓門を含む金沢駅東広場など、金沢駅周辺市街地の整備を積極的に進めてきました。

さらに、本県の広域幹線道路整備の基本方針である「ダブルラダー結いの道」整備構想に基づく道路整備や、温泉街などの主要観光地における無電柱化を核とした街なみ景観の魅力向上、金沢城公園をはじめとする交流拠点の整備など、新幹線開業後を見据えた施策を県下全域にわたって展開してきたところでもあります。

開業後半年間の観光客の入込みは昨年に比べて、兼六園が約1.4倍、金沢城公園が約1.8倍となったほか、県内の主要温泉地の宿泊数も約1.2倍となるなど、金沢はもとより加賀や能

登など、県下全域に開業効果が現れているところであります。この効果を最大化し、持続・発展させていくため、引き続き、広域交流基盤をはじめとした社会資本整備に取り組んでいくこととしております。

さて、本格的な人口減少時代を迎え、地方創生が国、地方を通じた大きな課題となっております。建設業においても、技術者・技能労働者の高齢化や若年層の不足が顕著となっており、担い手の確保は極めて重要な課題となっております。

本県においては、北陸新幹線金沢開業効果による交流人口のさらなる拡大を目指すと同時に、高等教育機関の集積や充実した子育て環境などの本県の強みも最大限に活用し、社会減と自然減の両面から対策を進めていくこととしております。特に建設業については、若者の入職促進に向けた取り組みが重要と考え、まず、即戦力の確保対策として、従来から行っている工業高校への学校訪問に加え、今年度から全国的にも珍しい普通高校等への学校訪問を実施しました。

その際、普通高校側から、建設業に触れる機会を求める声があったことから、就職先を決定する際の参考となるよう、現場見学会と併せて建設業で働

く若手技術者との意見交換会を開催しました。参加した生徒や学校からは、建設業を知る良い機会になり、進路を決める上で参考になったとの意見もいただいております。

また、建設機械オペレーターの高齢化に伴う担い手不足に対応するため、若年層や女性など経験の浅い作業員でも施工が可能となるICT建設機械を用いたモデル工事に今年度から取り組んでおり、今後、その成果を踏まえ、新たな建設事業のモデルの確立を目指していくこととしております。

このほか、小中学生とその保護者を対象とした親子現場見学会の開催や、児童向けイベントにおける土木ブースの出展など、中長期的な担い手の確保に向けた建設業のイメージアップを図るための取り組みも実施しております。

建設業は、社会資本の整備や維持管理はもとより、災害復旧や除雪など、地域の安全・安心の確保の観点からも大きな役割を果たしている重要な産業であり、今後とも、関係機関と連携を図りながら、建設業が若者にとって魅力ある就職先となり、多くの若者が働く活力ある業界となるよう、担い手の確保・育成にしっかりと取り組んでいくこととしております。

対談



日本建設業連合会北陸支部長

守田 進

Susumu Morita



北陸地方整備局長

藤山 秀章

Hideaki Fujiyama

【日時】

平成27年10月8日(木) 9:30～

【場所】

白山会館2階 明浄

今回は、本年4月に就任された北陸地方整備局長藤山秀章氏と、日建連北陸支部長守田進氏による対談です。局長ご就任以来6ヶ月を経てのご感想や、北陸の地域づくり、担い手確保等についていろいろと、お話を伺いました。

- ① 北陸地方整備局長ご就任6ヶ月を振り返って
- ② 北陸の地域づくりについて
- ③ H28年度予算概算要求について
- ④ 担い手確保(入札契約制度含む)について
- ⑤ 建設業界の広報活動について
- ⑥ 建設業界、日本建設業連合会への要望について
- ⑦ 災害対応について
- ⑧ 終わりに

藤山秀章氏 略

昭和56年4月	建設省 採用
平成 8年4月	同 中国地方建設局 斐伊川・神戸川総合開発工事事務所長
◇ 12年1月	フィリピン共和国(マニラ)派遣
◇ 17年4月	国土交通省 河川局 河川計画課 河川情報対策室長
◇ 19年4月	岐阜県 都市建築部長
◇ 22年4月	国土交通省 関東地方整備局 利根川上流河川事務所長
◇ 24年4月	内閣府 政策統括官付(防災担当)付 参事官(調査・企画担当)
◇ 26年7月	国土交通省 水管理・国土保全局 水資源部長
◇ 27年4月	北陸地方整備局長(現職)

(支部長)

日建連北陸支部の守田でございます。よろしくお願ひ致します。

藤山局長におかれましては、本年の4月1日に北陸地方整備局長にご就任され、大変お忙しい毎日をお過ごしのことと思いますが、本日は対談ということでお時間を頂き、誠にありがとうございます。

本日は、北陸の地域づくりの考え方などをお聞きしながら、お話を進めていきたいと思ひますので、よろしくお願ひ致します。

①北陸地方整備局長ご就任6ヶ月を振り返って

早速ですが、北陸地方整備局長にご

就任して6か月が経ったところで、この間に地域の知事、自治体首長や建設業界の方々から様々なご意見やご要望をお聞きしていることと思ひますけれども、この6か月間を振り返って頂いて、北陸地域のご印象などをお聞かせ下さい。

(北陸地方整備局長)

今、地方創生でそれぞれの地域が頑張っている中で、こちらに来てすごく思ったのが、北陸新幹線の開通もあって、富山、石川はものすごく元気がいいということです。

その一方で、平成24年のアベノミクスの補正予算の効果が、昨年あたりまで続いていたことから、平成27年度の地域の建

設業の方々の仕事量は、実は相対的に大分落ち込んでいるところがあります。そのため、まちの活気に対して地域の建設業界のギャップをものすごく感じているところがあり、本当に今、経済全体と公共事業全体の関係がものすごく気になり、そればかり気にしている半年だったと言うところ です。



北陸新幹線(H27.3.14 金沢開業)

地方創生では、マスコミが言っているのは、主に観光ですけれども、調べていくと、例えば、大きな製造業の本社機能の一部を移転してきているとか、研究機能の一部を持ってきているとか、南海トラフとか首都直下型地震を考えたときに、いろいろな企業が分散化・フェイルセーフの意味で、この北陸地域にある一定の期待をしているということを感じています。

②北陸の地域づくりについて**(支部長)**

北陸地方整備局では、「安全で安心な地域づくり」、「活力ある地域づくり」、「魅力あるまちづくり・地域づくり」という3つの事業方針のもとで、北陸全体の地域づくりを進めていると聞いておりますが、北陸の地域づくりの進め方や主なプロジェクトというものについてお聞かせ下さい。

(北陸地方整備局長)

昔は、治水事業はこれです、道路事業はこれです、港湾事業はこれですという説明を国土交通省はしてきましたが、現在は、なかなかそれでは理解が得られません。今、言われたように、地域にどういう形で貢献するかというくりに説明をするようになってきたという経緯があります。大きく言うと、安全・安心な社会を作ることと、人々や社会の利便性を向上する仕事、といったほうが分かりやすいのではないかと考えています。安全・安心ということでは、当然、治水事業が入ってきますし、大規模地震や津波が来たときに、経済とか、物流をどうするのかという意味で、港湾と道路というものが効いてきます。利便性の向上では、交付金という形で県と市町村に予算的な支援をしている中では、道路と港湾に加え、ベースのところで例えば下水・上水道、

公園なんかが入ってきます。これに再開発と区画整理も含めて、まちづくりという話になります。行政の中では、国がやる仕事と県がやる仕事と市町村がやる仕事というのは、割と明確に割り切りができていて、しっかり調整もされているのですが、全体として束ねてどう説明するかというと、私どものこれまでの説明の仕方は少し足りない部分があったと感じています。



大河津分水路

国土交通省が直轄で行う大きなプロジェクトとしては、やはり大河津分水路の抜本的な改修と日沿道のミッシングリンクの解消を本格的にこれから進めていくことが、一番大きな話として説明させていただいています。これはあくまで象徴的なビッグプロジェクトであって、全体の枠組みを見た場合に、治水や道路、港湾など広域を考えて実施する仕事、それを補完するような形の幹線道路の改良や防災対策など各地域で骨格となる仕事をしています。

国土交通省だけでまちづくりはできない話で、まちづくり、地域づくり全体の話でいきますと、昨年、国土のグランドデザイン2050というものを国土交通省として策定し、それを受けて今年の8月に国土形成計画というものを策定しました。今、各地域単位で広域地方計画というものの策定作業を始めており、有識者の方々



日本海沿岸 東北自動車道(日沿道)

や行政機関から、ご意見を伺っているところです。

(支部長)

日建連の仕事というのは、もう泥にまみれて、歯を食いしばる仕事も半分ありますが、半分はまちづくりというか、国土に対する貢献というところを今、おっしゃっているように、少しマクロなところから説明しないと、特に学生の方がよく分からないと思っています。むしろ小さいセグメントのところに入っていくと、橋とか、トンネルというと分かりやすいのですけれども、やはりグランドデザインみたいなものは、もう少しみ砕いて学生に伝えていかなければいけないのだらうなと思ひます。

それから、ここ4年ほどは北陸地域に大きな災害というのは発生していないと思うのですが、先月の台風17号、18号による大雨の災害や大規模な地震や火山噴火などによる災害など、大規模災害の発生リスクという点では、むしろ高まっていると思ひます。また、北陸地域では、世界的に有数な豪雪地帯ですが、グランドデザインの流れで防災ということも含まれているのだと思ひますけれども、防災対策というセグメントで考えた場合、その考え方や防災について具体的な取り組みについてお聞かせ下さい。

(北陸地方整備局長)

以前、内閣府の防災担当部局にありまして、そのときに南海トラフの巨大地震と首都直下地震の被害想定を担当しておりました。相手が何十年に一回、何百年に一回、ものによっては何万年オーダーに一回というものになります。国土交通省において治水をやっている人間は、オーダー感でいったら、それが100年に一回とか、50年に一回とか、そういうものをターゲットにやっているわけです。東日本大震災で巨大な地震と津波であれだけの被害を受けました。それがあまりにもショッキングで、皆さんもまだあの映像が焼きついているので、防災に関しては、一時期よりも強い関心を持っておられます。私は防災の仕事は、一步一步確実に進めていかなければならないものと思っています。予算を集中的に、5年でも10年でも投入して、一挙にレベルを上げられるかというと、やらなければいけない量がとても多い訳です。国のおかれた財政状況

云々から見たときに、防災というのは、一歩一歩実力を高めていくということが重要であり、一挙に実力が上がるというものではないので、危機管理をしっかりしておかなければいけないと思っています。

そんな中でも、大河津分水路だとか、ダム事業だとかも見直しを図ったうえでやるべきものは集中的にやる。ものによっては10年あるいは15年かからないと効用を発揮しないというものについては、それはできる限り集中的に投資をして1年でも早く効用を発揮するようにしなければいけない。それはプロジェクトごとに割り切りで考えていかなければならないものだと思います。

危機管理という意味では、日建連も指定公共機関に指定され、また各地域の建設業協会も地方指定公共機関になる動きがあるわけですが、ある意味、危機管理上は、非常にありがたい話です。協定を結ぶことにより責務を負って頂くことになるので、いざとんでもない災害が起きた時に、どういうフットワークでどう動くかを日ごろから準備しておいて頂きたいと思います。今は、東日本大震災以降の全体の流れとして、危機管理上いろいろな議論がされて、一つ一つが改善に向かっているのではないかと思います。

（支部長）

日建連として危機管理対応をやらなければならないことというのは、イメージトレーニングだけではなくて、やはり訓練をしていかないとなかなか前に進まないと思っています。イメージトレーニングだけでは、現実感がなくなってしまう訓練にならないと思っています。

（北陸地方整備局長）

いざ広域な、強烈な災害が起きたときには、今の優先順位は何なのだという判断など、その辺のマネジメントを私たちがしなければいけないのではないかと思います。

（支部長）

地方公共団体の方々は、スタッフの数も限られており、やはりそういうことは国民から非常に注目されているというか、国が引っ張っていった欲しいという感じがします。

（北陸地方整備局長）

鬼怒川で決壊したところは、堤防を暫

定的に塞ぐ仕事は、大手のゼネコンにやって頂きました。初期のころはTEC-FORCEを派遣し、排水ポンプ車で排水作業をしていますけれども、実際、北陸地整も40数名の職員、10数台のポンプ車を派遣していますが、実オペレーションは、北陸管内の建設会社の方々に行って頂いています。



TEC-FORCE（茨城県常総市）

被災地は氾濫した土砂で大変なことになっていますので、泥の処理から、極端な話、あれだけの家屋が水に浸かっていますので、大量のごみが出てきています。初めの頃は、廃棄物処理業者がその処理を行うことになります。そうすると次はその地域の建設業の方々の出番となります。だから、いろいろな仕事の割り振りで、何が今の優先順位なのかということを、先手を打ってお願いしていかなければいけないと思っています。

（支部長）

いろいろな国の機関や民間との調整、首長との意見の調整、または自衛隊や消防・警察の方々との調整をするといった、地方整備局の限られる人数の中で、短期間にそういう緊急対応の調整や優先順位をつけるといったことは、かなり広範囲な力量を問われ、大変な仕事だと思います。

（北陸地方整備局長）

この危機管理対応は、この10年くらいで全く仕事の仕方が変わってきました。ものづくりをするのが私たちの仕事ですということで、ずっとやってきたのですが、安全安心に関しては、いざ起きたときのためにどう動くのかという仕事の仕方というか、その範疇の仕事が大きく広がってきたという部分はあります。その中で、言い方は難しいのですが、建設業界の方々にすごくお世話になっているのですよということをもっとPRしなければいけなかったという反省をしています。

（支部長）

やはり社会にアピールというのでしょ

か、広報というよりは、もう一歩踏み込んで説明していくことが重要なのではないかと思います。あえて誤解をされることを恐れずにアピールすることによって、結局広く伝わるのではないのでしょうか。

（北陸地方整備局長）

現場では本当に一生懸命やっていますし、的確にきちんとやっていますので、そこをただ普通に見ていただくだけで、普通に知っていただくだけでも全然違うと思います。

③H28年度 予算概算要求について

（支部長）

8月末に公共事業関連費が約6兆円規模で、国土交通省関連の来年度予算の概算要求が行われました。北陸地域における主要なプロジェクトについて、大河津分水路の改修事業や日沿道、完成予定事業などの概要など、時間軸を含めてお話いただけたらありがたいと思います。

（北陸地方整備局長）

実は今年から概算要求の地方整備局版の記者発表をしていないのです。周りから見ると不思議なことなのですが、概算要求は全体としての枠取りをする話であって、その時点で実は各プロジェクトで何億円要求しているということではなくて、例えば、日本全国でこの道路事業は何千何百億円、治水事業のうちの河川事業、砂防事業、ダム事業それぞれが、来年度、全国で何千億円だとか、そういう枠取りの要求が概算要求になっているのです。

また、6兆円云々といったときに、実はいろいろなところでお話していますけれども、過去15、16年、当初予算がずっと落ちてきて、3、4年前から当初予算が対前年度1.0前後になっているのですけれども、この予算の枠組みがこの概算要求の時点で、義務的経費を除いて、事務的には対前年度0.9が基本になっています。そして0.9に対して30パーセント分をアッパーリミットに、新しい日本のための優先課題推進枠が設定されています。要するに何もしないと対前年度0.9になってしまうのです。この推進枠に対して各省庁は知恵を絞って何にどういう形で力を入

れていき、それがどうやって世の中に役立つのだということをお示しすることになります。今の時点で言うと、先ほど、お話のあった6兆円というのは、対前年度でいくと1.16になります。その数字だけを見て、報道機関の方々は財政事情が厳しいのに、また各省庁はバラマキの要求しているかのような、批判的な論調で8月の末から9月にかけて報道をされた面がありますけれども、実際は12月の政府原案の設定に向けて、これから各省庁と政府全体としてのやり取りをしていくという構図になっています。

（支部長）

概算要求をするときのアイデアというのでしょうか。そういうところの勝負になってくるわけですね。

（北陸地方整備局長）

そういうことです。前大臣の太田大臣は、安定的に予算を確保していくことが重要であるという言い方をされています。先ほど、言いましたように、安全、防災、減災、耐震化、メンテナンスを含めて、すべてが必要なことであって、アップするに越したことはないのですけれども、アップダウンが激しいということが、プロジェクトをマネジメントしていく意味において、一番困る話だと思っていますので、予算を安定的に確保していくということが、1つのキーワードとなります。

（支部長）

安定的というのは、私ども日建連としても、非常に重要なポイントだと思っています。安定しているということは、計画的な予算措置ができるということです。また安定的な人材の雇用もできます。やはり学生たちのこの業界に対するマイナスのイメージというのは、山があり、谷がありみたいな不安定さに尽きるのではないでしょう。

ですから、やはり安定的というのは、いろいろな組織やいろいろな人たちにとって、重要な話だと、私どももつくづく感じているところです。

④担い手確保 （入札契約制度含む）について

（支部長）

少し話題を変えて、担い手確保の育成に関して女性の活躍推進も含めた

具体的な取組みについてお聞かせ下さい。

（北陸地方整備局長）

実は役所の中もそうですが、特に土木の世界は、人材でいくとまだ学生の中の女性のシェアが非常に低いという現状があります。ここ一、二年の急激な女性活用については、もう少しじっくりやっていく必要があると思っています。やはり需要と供給の話があります。ただし、用意はしておかなければいけないと思います。時代の流れがそうですし、1億総活躍ということは、当然、女性の活躍ということを前提にしているということですから、建築の世界でも、土木の世界でも、女性が当たり前前に働いていける環境づくりというのは、長い時間をかけてでも作っていく必要があると思います。環境づくりをする私たちの立場は、女性が活躍の場として、大勢入ってくるのだという前提において、一つ一つ準備をする必要があります。今は、まだ全然そこまでいっていないので、一歩一歩、とにかくこれからこうやっていくというプレゼンテーションといいますが、大学生、高校生、中学生に土木建築の世界というのは、決して女性に閉ざされた世界ではないですよ、ということをどんどんアピールしていく時期にあると思います。それが何年かたつと、受け手のほうがそれを感じて、ではやっていこうかということになると思っています。例えば、技術者に女性を配置したものに限定する工事の試行を北陸地方整備局では今年も数件行っています。まず女性に土木の仕事をやって頂いているということをアピールするという意味合いで、試行しています。あとは現場レベルでは、例えば、トイレ一つ取ってみても、当り前のことのように改善をしていかないと、これから毎年女性の数が増えていくと思いますので、そうしたときに困らないようにしておくことが重要だと思います。だから、標準形として女性が働く職場であるという前提に立った、極端な話、積算体系まで変えていかなければいけないかもしれません。どこまで細かくトイレを見ているとか、現場の事務所がきちんと仕切りがあつて、女性と男性が問題なく休憩できるようになっているか、本当はそこまで見ていかなければいけないと思います。

（支部長）

結局、カタカナで言い直すと、ダイバーシティーだとかイクパパだとかという話になってしまうのですけれども、いろいろな建設会社、また民間会社の中で、女性のライフサイクルを支えるためには、結局、旦那さんがある時期、仕事を半日で帰らなければいけなくなり、そういう時に、一般的にはやはりキャリアの評価が悪くなるのではないかということに繋がっていくと思っています。女性の活躍については、日建連側も一生懸命考えますが、国土交通省においても、結局は旦那さんと奥さんと両方の対策を考えないといけないということですね。

（北陸地方整備局長）

それは日建連、あるいは建設業界だけではなくて、いろいろな企業でもそういう葛藤があつて、日本文化の歴史的経緯の中で、今、変わろうとしている時で、やっているところはしっかりやっていると思います。実は、行政の役所の中も、同じ悩みを抱えているところがあつて、システムとしては、男性職員も育休を取れるわけですが、お話があつたように、それを全て取得したら、自分の評価は下がるのではなかという一抹の不安を持っている人はたくさんいます。当然、そんなことはありませんと言いますが、職場の空気は、「この忙しいのに」という空気は存在しています。そこはどれも一緒だと思います。それをなかなか急転回するのは難しいですけれども、これからの世の中、そうではないということをやはり一つ一つ、みんなが理解しないといけないと思っています。

⑤建設業界の広報活動について

（支部長）

先ほどから、広報、又はイメージ戦略も含めまして、この話が出ていますが、日建連の北陸支部では、安全・安心な国土づくりに資するために、社会資本整備の意義とか、必要性、又はそのやりがいとか、そういう理解促進を図るために、なるべく、積極的に情報発信しているつもりでございます。支部活動のPRについても、その充実を図るというか、もう一歩、前に出していきたいというところなのです。地域づくりを担う魅力ある建設産業ということへの理解促進の観点から、地方整

備局のほうでも広報というものに対して、具体的な取組み、又はこのようにしていったらどうかということについてお聞かせ下さい。

（北陸地方整備局長）

私ども、公共事業を進めている立場として、広報が足りなかったり、下手だったり、やり過ぎのときもあったと思います。それはやり方が間違っていたからなのではないかとの反省のうえで、現場見学会というものを頻繁にして、それも大学生だけではなく、高校生、中学生、小学生にも現場を見てもらうという地道な作業を行っています。それと各事務所も、数年前からやっていますけれども、出前講座と言って、事務所の係長だとか、課長が小学校や中学校に行き、信濃川とはとか、高速道路とはとか、橋梁の作り方とはとか、あるテーマに基づいて、リクエストがあれば、私どもは何でも説明に行きます。その中で私どもの公共事業というか、公共施設の重要性だとか、そういうものについても説明をするという実態があります。そういう活動は地道に広げていく必要があると思います。



現場見学会（吉津トンネル）

そういう意味で、広報とか、PRというのは、よく話題になるのが、ターゲットは誰だということではないかと思います。回り回って、最後はそこに行き着くのです。漫然と広報する。「漫然と」というのは言葉が悪いですが、この活動することによって、どういう人たちに何を理解してもらいたいのだということを明確にしないといけないのです。またアカウントビリティの一環として、何かあるたびに、今、どんどん記者発表をします。記者発表をしますので、何のために記者発表をしているのかといったら、それはテレビのニュースで取り上げて頂きたい、新聞に書いて貰いたい、テレビ、新聞を通じて、一般の方々にこういうことを今、やっているのですよと伝えたいからです。こういう

公共事業がこんな役立ち方をしているということを分かってもらいたいから、私たちは記者発表をしています。今だけではなくて、5年も10年も言い続けなければいけないと思います。それを、ステージを変えつつ、場所を変えつつ、いろいろな場面で、いろいろなツールを使ってやって、初めて社会基盤整備に対する理解というものにつながってくると思っています。

（支部長）

広報の一例として、昨年2月、異常降雪により関東甲信地方を中心に大規模な交通障害が発生したときに、北陸地方整備局がTEC-FORCEとして職員や除雪機械を派遣し、除雪応援・支援を行いました。その状況映像などが大多数の国民の方々には余り伝わっていないような印象があります。



TEC-FORCE（山梨県へ派遣）

（北陸地方整備局長）

その辺は、本当にベースのところですが、TEC-FORCEとしてあるいはその一連として建設業の方々がオペレーションをしている場合には、そのユニフォームは、例えば、新潟県建設業協会とか日本建設業連合会北陸支部とかという、「はっぴ」とは言いませんけれども、そういうオーバーコートを着て作業をするということが、本来、重要になってくると思います。

（支部長）

そういうものは地道にやるものであって、してやっているぞと言うものではないということでしょうか。

（北陸地方整備局長）

昔からの日本国の土木の奥ゆかしさみたいな。

（支部長）

助けに来てやっているのだというように取られるのがいやだといった、その謙虚さが良いのだというところはあるかもしれませんが、やはりある程度そういうものが

伝わって、地方整備局が中心になってみんなが集まっているのだというように、一つの広報の仕方もあるのではないのでしょうか。

（北陸地方整備局長）

やはりこれからは災害復旧現場でも、どこの組織がやっているのかということ、今ほど話が合ったようにうまく見せていかなければいけないと思います。やり過ぎはいけないのだけれども、ああ、あの組織がやっているのだというのがきちんと分かるような仕方をやっていかなければならないと思うのです。

⑥建設業界、日本建設業連合会への要望について

（支部長）

我々建設業界の話なのですが、国内総生産、または全産業の中の一般の労働者の中では1割を占めています。ですから基幹産業であるという自負心があります。特に、北陸地域というのはそのウエイトがさらに他地域よりも高いわけですから重要な産業であるということと認識しています。北陸の地域づくりという観点から日本建設業連合会または建設業界に対して、ご意見、ご指摘、またはここがだめなのではないか、こうするべきではないかというお話がございましたら是非、お聞かせ下さい。

（北陸地方整備局長）

皆さん、暗黙のうちに将来的に仕事が増えなくなるのではないだろうかという思いがおりになるのではないかと思います。50年、60年、70年たった公共施設をリプレイスする仕事が増え出してくるかという話がこの後控えていますので、そんなにドラスティックに仕事が増え減っていくということはないものがある程度のペースで出てくるとしています。日本の人口が減っていく中で、今、担い手の確保育成で非常に苦しんでいるところがありますが、日本建設業連合会のご提案で生産性をどうやって上げていくのかというのが大きなテーマの一つになっています。それは私もまさしく今からやっておかないといけないことだと思うのですが、生産性の向上で、昨今はプレキャストとか

ICTを活用して云々とかですが、逆にその辺のところを官主導ではなく日本建設業連合会側からこうするととも生産性が上がりますという具体的な提案という形で意見交換していければいいのかなと思っています。今は官側からテーマの提示とある程度の方向性を示したら、あとはいろいろな現場で試行錯誤しながらやっていくという枠組みになってしまっていますが、具体的な提案としてこうしたらどうだろうかと行って頂き、受け手側から見たらこの規制緩和が必要だとか、此処のこういうところが必要だということを書いて頂ければありがたいと思います。

毎年意見交換させて頂いていますけれども、書類を減らすこと一つを取ってみてもこういう書類は要らないのではないかという、本当に個別具体的に攻めていったほうが、それを積み重ねていくと、2年、3年たつと結果的にこれだけ減りましたという話になります。今、それぞれの現場でコミュニケーションをしっかり取るようにはしていますので、検討会を作って1本1本サクサクと、これはやめましょうとか、これはこう改善したらどうですかというのを一つ一つご意見を頂いて具体化していくのが重要だと思っています。

（支部長）

日本建設業連合会または日本建設業連合会北陸支部に対して、個別案件の提案は難しいにしても生産性向上の提案、その一部としてプレキャストやICTがあるかと思いますが、やはり生産性を上げない限りは、結局、GDPも上がってきませんし、先進国の中でリーディングの国になるためには、ある一定の生産性が上がっていかないとだめなわけですね。

（北陸地方整備局長）

先ほどの書類を減らしませんかというのは、大きくくりでいくと規制緩和に当たる部分もあると思うのです。安全に関しては1回締めたら一歩も引けないところがあるかと思うのですが、安全を確保しつつ、もう少し仕事をうまく転がせる部分があるのではないかと。

少し話が違ってきますが、日本の新幹線がインドネシアで採用されていれば、価格だとかそういう単一的な物事ではな

くて、日本の技術で日本のマネジメントの日本のオペレーションだから信用できるのだと言えたのです。製造業の世界ではグローバルの流れの中では安かろう良かろうの製品に関しては競争力を失って、それは縮小していき、今、生き残っているところは日本らしさのいいところ、しっかり仕事をして信頼が置けるからというものが多く、そういうものはこれからもしっかり生き残っていくのではないのでしょうか。この点については、これからは伸びしろがあるのではないかと考えており、それを建設業に当てはめるときに、どうしていけばいいのかなと思っています。一方では、きっちりやりすぎではないかという思いがありつつ、この良さは良さとしてきちんと残していかなければならないということです。

（支部長）

日本の国内で外国の企業と戦う率が国内では非常に少なく、その辺が前例主義になってしまうのではないのでしょうか。外国で戦うときは、世界の中で戦うわけですから、そのときには非常に内向きな性格の日本人は、なかなかああいう社会では勝っていけない。やはり前例主義でやっていると感じないところがあるということです。

（北陸地方整備局長）

少し話が大きくなったので、北陸に特化して考えたときに何があるかと言えば、例えば、冬期間の取り扱いが今のままで良いのかということがあると思います。北陸の特性で行くと、冬期間の取り扱いをどうするのかというようなことは、やはり北陸、東北、北海道もありますけれども、先頭に立ってやっていかなければならないと思っています。その他、歴史的には、北陸地方整備局はリーディングヒッターとしてプレキャスト化の検討を進めています。生産性の向上というのは初期のころはお金がかかる話なので、それが定常化して初めて落ち着いてコスト的には安くなる部分もありますが、それを検討している間、それが標準になる間というのは在来に比べて恐らく高くつくケースのほうが多いのだと思います。プレキャスト化にしても情報化施工にしても、その辺をどうやってブレークスルーしていくかというのは、一緒に

なって議論していかなければならないと思います。

（支部長）

その辺の生産性の向上とそこに含まれているプレキャスト化だけではなくて、工場化施工という言い方ででしょうか、その中の一部にプレキャスト化があつて、建築生産とか土木生産、又はインフラ生産というものをなるべく工場化的なもので処理することによって、冬の雪に対する対策または人の、なるべく少ない担い手でもできる。そうすることによって生産性が上がれば土日も休める。土日も休めたら若い担い手も入って来るのではないかと思います。ただ、その初期段階で、確かにコストと戦っていかなければならないので、甘えてはいけないと思いますけれども、この点については一連の流れの中に全部絡んでくるので、是非お願いしたいと思っています。

⑦災害対応について

（支部長）

9月の関東・東北豪雨災害が発生しましたが、この北陸地域における対応のことを考えると、今後の考え方みたいなものはあるのでしょうか。

（北陸地方整備局長）

1本1本の河川、阿賀野川はどうか、信濃川の大河津分水路から下流地区はどうかと考えていく必要があります。それで、例えば、信濃川の大河津分水路から下流のところは本川とは全く違う洪水が相手になりますので、そういう意味では、平成16年と平成23年に大きな水害が実際に発生していますので、一番訓練がされているはずですが、堤防が切れるということを想定して何か準備ができていますのかということを確認する必要があります。日本の文化とか歴史は言霊の世界なので、昔から切れるなどという言葉を使うと縁起が悪いというのですが、今のご時世は切れるということを前提にして、ここで切れたら何時間後に氾濫水がこちらに向かいますという、まさしく鬼怒川で起きたことを信濃川で考え、千曲川で考え、黒部川で考え、梯川で考え、すべての川において、ここで切れたらどうなるのかと考える必要があると思います。ここで切れる前何時間はどういうフッ

トワークで動くのか、ということをもう一度原点に返って、各自治体の首長と確認をする作業をしなければいけないと思っています。

（支部長）

そうすると、大変な業務量になりますね。
（北陸地方整備局長）

ですから、先ほども言った大きな仕事の仕方として、安全・安心のためにハードを整備するという仕事と危機管理をきちんとする。その危機管理をきちんとするという意味では、今回の鬼怒川の決壊を人ごとだと思わずに、自分のところに線状降雨帯が張り付いたらどうなるのだという目線で、もう一步踏み込んで考える。あまり細かくやっていると、実際に起きたときに機能しないといけませんから、そのときに、まさしく地元の建設業の方々とはどういうやり取りなのか、あるいは日本建設業連合会にどういう支援をお願いするのか、そのときに道路はどこどこが通れると想定しているのか、までできていますかということを考える必要があると思います。

（支部長）

やはり災害が起きたというイメージをするためには、先ほどの言霊ではないですけども、最悪のケースが起きたとの前提にたって、誰がいつまでに何を行うかをしっかりと考える必要があると思います。ひょっとしたら、自分の家の家族を守るためにまずは人が集まらないかもしれないし、建設機械も水に浸かっていて動かないかもしれません。

（北陸地方整備局長）

被災したそのエリアで助けを望むのはまず無理だと考えて、他の流域の方をお願いするというのも考えていかなければいけないでしょう。

東日本大震災以降、防災の考え方がグレードアップされたのは、今はもう言う人がいなくなりましたけれども、実は、防災の危機管理の考え方として、「想定外は絶対に許さない」という、物事の考え方の本質的なところが変わったのです。

だから、今はあらゆることを想定しておかないと世間の方々から許されません。というのは、施設の実力が分かっている、それを乗り越えるものは必ず発生するのだということです。それは洪水だけ

ではなくて、地震もそうですけれども、そこはイメージトレーニングの世界になると思っています。

⑧終わりに

（北陸地方整備局長）

担い手育成のところ、当面のフットワークとしては、先ほど言いましたようにいろんな現場を見学したり出前講座をしたりというお話をしましたが、今、建設業の方々と一緒にやっていきましょうということで協議会なども設置しています。大学、高校がまだメインのところがありまして、極端な話、即戦力の場合は工業高校に行ったりしているのですが、普通高校の段階でも大学で土木、建築に行ってもらわないといけないということ、どんどん行くと、中学校、小学校まで含めて幅広くにアピールしないといけないと感じています。そういう場面でもいろいろご協力を頂かなければいけないかなと思います。それと、私があちこちで言っているのは、担い手育成というすぐそういう現場を見て頂くとか、公共事業に対してご理解いただくというところに力点が行くだけでも、大前提として、建設に携わる企業がまっとうな利益を得ること。そこで働く方々がまっとうな年収を得ること。それと、その次に職場環境、現場環境が良くなること。要するに、若い人達がどういう職業を選ぶのかといった視点にもう一度戻って、そこをどこまで追い求めていかなければいけないのかということです。私達がやらなければならない仕事はもう一つ、年収だとか収益性を上げるとか現場の環境をよくするということに加え、安定的に仕事がこれからも確保といえますか、発生して行くのだということ



（※資料写真は北陸地方整備局提供）

言わなければいけないと思っています。そしてまた、ここは広報とも絡んでくるのですけれども、面白い仕事だとか希望があるとか、その部分がすごく弱いと思うのです。要するに、私どもの年代は日本全体が右肩上がりだったので、建設という分野自体もとても活気があって、いろんな、白地のキャンパスにわっとこれから20年かけてこれをやるぞみたいな、そういう意味では仕事自体に躍動感とか夢があった部分があって、あの業界に行ったらものすごく楽しそうだなとか、言葉を換えると希望があるようなとか、そういう面白みがあるようなところがあったと思うのです。それが何となく今は社会が成熟化しているところもあって、転職がいやだとかそういうところに対抗するためには、仕事が楽しいとか、夢があるということをもう少し正面切ってアピールする必要があると思います。その辺は日本建設業連合会も、私共もどうやらそこがアピールできるのかということを勉強しないとけないと思います。楽しい、面白い、希望があるみたいところを個別具体的に何をし、どう言ったら若者に伝わるのかというのを考えて頂きたいと思います。

（支部長）

ありがとうございます。日本建設業連合会というか、それぞれの建設会社が考えなければいけないのですが、先ほどの希望とか夢みたいなものも含めまして、わくわく感というものをどう伝えていったらいいのか考えていきたいと思いますので、今後ともご指導のほど、よろしくお願いします。

今日は長時間に渡り、本当にありがとうございました。

東日本高速道路(株)新潟支社との意見交換会

■日時：平成27年9月16日(水) 15:30～17:00 ■場所：東日本高速道路(株)新潟支社 会議室



出席者名簿(敬称略)

東日本高速道路(株)新潟支社

今川技術部長
小林事業統括課長

渡辺道路事業部長
斎藤建設課長

奥技術審査役
神田技術管理課長

(一社)日建連北陸支部

河本副支部長兼委員長
浅賀委員
木村委員
幸長委員
渡邊委員
桑原事務局長

早川副委員長
西口委員
嶋田委員
尾藤委員
清水委員
本間事務局次長

志満副委員長
中澤委員
川島委員
梅崎委員
高辻委員

※役職名は意見交換会当時のもの

東日本高速道路(株)新潟支社における「技術力・マネジメント力向上行動計画」や「発注関係事務の運用に関する指針」への取り組み等について、今川技術部長及び渡辺道路事業部長をはじめ幹部の方々にご出席いただき、意見交換会を開催いたしました。

議事概要 1

平成27年度における新潟支社管内の事業概要について

① 上信越道4車線化事業については、全体で約25キロの区間の5か所で工事を行っています。お陰様をもちましてトンネル工事、土工工事、下部土工工事すべて発注することができました。信濃妙高工事約10キロが一番懸案でしたが、7月に契約を結び土工工事すべて動き出したという状況です。残りの上部土工工事である二俣川橋と深沢川橋は今年度中に公告予定ということで、全線にわたって橋梁工事、土工工事をすべて出していく予定になっております。舗装と施設関係については、来年から再来年にかけて工事を発注して平成30年度の完成を目指して、鋭意

取り組んでいる状況です。

金谷山トンネル工事につきましては、今日貫通すると聞いており、正式な貫通式を来月行う予定です。天神堂トンネルにつきましては、約30メートルの掘削が始まっており、これから本格的な掘削が始まってくるという状況です。残りのトンネルにつきましても、順次掘削に入る予定です。

二俣川橋下部工や山川橋下部工、儀明川橋下部工は順調に進んでおりまして、今後、平成30年度に向けて工程短縮をいかに行っていくかという大変難しい課題をもっていますが、順次進めて行きます。

- ② 磐越道の4車線化の工事については、吉津トンネルが貫通して、現在、覆工コンクリート、インバート施工を行っています。上部工については、五十母川橋の上部工が今月から着手となり、平成29年度に向けて順調に進んでいる状況です。
- ③ スマートインターチェンジについては、新潟県内8か所で供用していますが、新潟東スマートインターチェンジが事業中です。新潟東スマートインターチェンジにつきましては、軟弱地盤対策に時間を要して盛土工が若干遅れている状況ですが、今年度末までには開通する予定です。長岡北スマートインターチェンジにつきましても、現在、盛土工が始まってきたということで、来年度の完成を目指して鋭意工事を進めているところです。
- ④ 関越トンネルについては、10月2日で供用してから丸30年を迎えることになり、10月2日に湯沢で記念シンポジウムを行う予定をしています。トンネルの掘削技術やトンネルの換気、施設系の技術に関する講演会とシンポジウムを行う予定です。合わせて10月1日から関越トンネルが70キロの規制速度を10キロ上げることができました。
- ⑤ 新潟支社管内の今後の事業については、一つは耐震補強工事が若干残っておりまして、湯沢管内で二、三橋

残っていると、親不知海岸高架橋の耐震補強工事が残っています。これは、今年度から工事発注を行う予定で計画しております。また、大規模更新関係については、新潟支社管内は多少、進捗が遅れている状況ですが、盛土法尻の補強工事を今年度からの予定ということで計画しております。橋梁の床版の架け替え工事あるいはトンネルのインバート等の設置工事については、来年度以降の発注に向けて、今いろいろな検討業務を進めています。後ほど技術部からお話があるかもしれませんが、床版の架け替え、トンネル内のインバートの設置は、供用した路線の中で行うのは技術的にも難しいですし、交通規制の仕方も含めて、いろいろ検討事項が多岐に渡っているので、発注方法を含めて今後検討していきたいと考えているところです。

⑥ 最後になりますけれども、この間に緊急の安全協議会を開かせていただきましたが、新潟支社管内では毎月のように工事中事故が起きております。是非、現場の安全管理に気を付けていただいて、作業員の方が怪我をされないようハード面、ソフト面を含めて取り組んでいただければ幸いかと思います。

議事概要 2 技術力・マネジメント力向上行動計画について

- ① 本格的なメンテナンス時代の実現に対応した技術基準や調達制度の整備等あるいは受発注間のコミュニケーションの円滑化への取組みについてお聞かせ下さい。

▼ 回答要旨

- ① NEXCO全体でどういう状態であるかということをまず先に述べたいと思いますが、技術力・マネジメント力向上行動計画の中に、「技術基準について」は、これから大規模更新・修繕事業、いわゆる特定更新等工事と称していますが、今年の4月1日に、これを実施するにあたっての判断基準、優先度の考え方、調査方法や修繕方法等の基本的な案の方針を定めたガイドラインをNEXCO3会社で制定しました。今後、橋梁・トンネルの特定更新工事につきましては、これらに基づきまして、適正かつ着実に実施してまいります。
- 次に、調達制度の整備については、大規模更新・修繕事業が円滑に進められるようにということで、設計段階から施工者の提案を反映させる方式など、多様な制度の検討導入を図っていくこと、道路補修工事では入札不調が多数発生していることから、現行対策である入札前価格交渉や契約制限価格の見直しの他、さらに改善を図るべく、発注単位や工期設定等、契約条

- 件について再検討をしています。
- 今後、特定更新等工事を進めていく上で、施工計画や仮設といった分野が非常に重要になってくることから、そういうノウハウをぜひ業界の意見を反映した形で取り組めるような施工計画提案型交渉方式も加味しながら考えてみたいと思います。受発注者間のコミュニケーションの円滑化につきましては、新潟支社独自の取り組みになりますが、既に日建連さんの方が先行して北陸地方整備局とやられているような受発注者間の意見交換会を参考にして、第1回を9月下旬に予定しております。やり方として、全体に広げるというのはなかなかできないので、信越工事の4車線化事業をモデルとして進め、定期的に開催して行きたいと思っています。
- ② 発注ロットや調達方法については、この場で上がった意見に関しては本社にも上げて行きたいと思っておりますので、ぜひ日建連さんから、こうして欲しいものがあれば、この場で出していただきたいと思います。

議事概要 3 発注関係事務の運用に関する指針に基づく取り組みについて

- ① 品確法が改正されまして、公共工事に関する品質管理について「発注関係事務の運用に関する指針」が4月から適用されていますが、調査設計段階、工事発注事

務段階あるいは施工段階において各発注者が取り組むべき事項ということで定めておりますが、新潟支社管内の取り組みについてお聞かせ下さい。

▼ 回答要旨

- ① NEXCO東日本でという話になりますが今言われた指針は、発注者が適正な事務の運用が図れるように定めた指針であり、各段階での取り組みが記載されています。現在、会社で取り組んでいる現状の紹介ということで、まず調査および設計段階について、設計変更のガイドラインと同時に今年の1月15日には調査等の請負契約における設計変更のガイドラインを制定しましたので、これで受発注者間の円滑な契約手続きが図れるものと考えております。
- 工事段階に入りますが、工事の発注準備段階において平成19年6月から導入した入札前価格交渉は、適正な価格というものを受発注者で技術交渉を経て設定するといったものです。次に不調対策では、拡大指名競争入札を平成21年4月から実施していますが、最近ですと設計金額、契約制限価格が1億円未満のものに対しての制限価格の見直しを平成21年1月から実施し、平成25年12月以降の入札から2億円未満に拡大して実施しているところです。入札不調の追加対策では、昨年の11月1日以降の公告工事から、入札前価格交渉の交渉タイプを不調対策の観点から一般管理費を除くすべての項目を交渉できることに改正しました。
- 総合評価落札方式により調達する工事について

は、応札者の事務簡略化の観点で技術資料の簡略化ということで1枚ペーパーにし簡便にしました。配置予定技術者の運用では、今まで配置予定技術者は競争参加資格で応募するときに定めていたのですが、これを契約締結後の配置ということで条件緩和しまして、配置予定技術者の運用の弾力化を図ったところです。

工事の施工段階ですが、設計変更のガイドラインを制定しまして、受発注者間のコミュニケーションを円滑化に推進するという中では、ワンデーレスポンス三者協議会等の実施を明文化したということ、新潟支社独自での取り組みということで工事中の意見交換会を信越工事事務所で試行実施するものです。

最後の工事完成後段階については、今後の取り組みになりますが、設計変更のガイドラインの運用が適正であったかどうかというフォローアップを図っていくことを考えております。従って、しゅん功検査を実施した後で受注者と我々との間で、運用面でどうであったか、また改善要望はないかなど、広く意見を吸い上げる意味での意見交換会というか打合せ会を今後やって行きたいと思っています。これに関しては、信越工事事務所だけではなくて、新潟支社の発注する工事すべてにおいて実施したいと考えているところです。



議事概要 4 設計変更手続きについて

- ① 国交省では「変更指示書」の文書による指示書になりますけれども、変更に伴う増減額を明示するという取り組み

みをしています。是非、NEXCOさんにおいても、そのような取り組みをお願いしたいと思います。

▼ 回答要旨

- ① これに関しましては、現状、そういった対応がなされていない状況です。NEXCOとしては国の動向を注視しつつ、適宜改善を図っていますが、今回、こういった意

見がありましたということで本社にも機会を通じて紹介するなど働きかけていきたいと思っています。

議事概要 5 若手技術者の育成・支援や女性技術者の活用について

- ① 最後の課題であります。若手技術者の育成・支援や女性技術者の活用への取り組みについてお聞かせ下さい。

▼ 回答要旨

- ① 国はモデル工事というところで先行してやられているところですが、国と比較してNEXCOは積極的に取り組んでいないというのが現状でございます。これに関しても、今後、国の動向を注視していきまして、そういった取り組みが図れるのであればというのが、今のところの見解です。なお、配置予定技術者の競争参加資格要件の緩和によって配置予定技術者の登用が比較的柔軟になったのではないかと感じているところです。

また、参考までに、この9月1日以降の調達において

は、配置予定技術者、要は現場代理人、監理技術者の変更が緩和されました。国が監理技術者制度マニュアルを改正した中で、途中交代するやむを得ない理由の中に「出産、育児、介護等」というものが加わったということがありまして、これを受けてNEXCOもそういった途中交代におけるやむを得ない理由という中に加えました。合わせて、さらに複数年契約、要するに契約工期が1年を超える工事で、1年を超えて従事したものに關しては途中交代を認めるようにしました。



特集

3

けんせつフェア北陸in金沢

みて、ふれて、知る 新技術・新工法

●開催日／平成27年10月16日(金)～17日(土) ●会場／石川県産業展示館【4号館】



テープカット



(実行委員長挨拶) 小口 企画部長



(開会挨拶) 藤山 北陸地方整備局長

産・官・学の優れた建設技術を紹介する「けんせつフェア北陸in金沢 2015」が10月16日(金)、17日(土)の2日間にわたり、石川県産業展示館(4号館)で開催されました。

本フェアは、国土交通省北陸地方整備局をはじめ新潟県、富山県、石川県、新潟市、金沢市、東日本高速道路(株)新潟支社、中日本高速道路(株)金沢支社、日建連北陸支部他の建設業団体で構成する実行委員会が主催し、12回目となる今回は「安全・安心」、「自然・文化」、「連携・活力」をテーマに158企業(機関・団体等)により271の技術展示が行われたほか、51の企業(機関・団体等)によるプレゼンテーションも行われました。

日建連北陸支部からは、18社46技術について展示があり、2日間で約4,000人の方々に、各社保有の建設技術を「みて、ふれて、知って」頂くことができました。

● 日建連北陸支部会員会社からの出展状況

会社名	テーマ			会社名	テーマ		
	安全・安心	自然・文化	連携・活力		安全・安心	自然・文化	連携・活力
あおみ建設(株)	●	●		大成建設(株)	●	●	
(株)安藤・間	●		●	第一建設工業(株)	●		
(株)大林組	●			東亜建設工業(株)	●		
(株)加賀田組	●			東洋建設(株)	●		
鹿島建設(株)	●			飛島建設(株)		●	
(株)熊谷組	●			西松建設(株)			●
五洋建設(株)	●			日特建設(株)	●	●	
佐藤工業(株)	●		●	(株)本間組	●		●
清水建設(株)	●	●		(株)不動テトラ	●		

● 日建連会員各社ブース



● 合同企業セミナー



● 基調講演

「建設業に必須!!
女性がイキイキ!
活躍できる職場・
現場づくり」

Officeアイム代表
森川あやこさん



● パネルディスカッション

「建設業を女性が働きやすい
職場にするためには」

コーディネーター

森川あやこさん

地元建設企業で働く女性技術者・技能者

加賀建設(株) 森高 靖子さん

北川ヒューテック(株) 樋爪 陽香さん

(株)明匠組 木下 佳音さん



● 出展技術プレゼンテーション



● 「北陸けんせつグッズ」オークション



● 除雪車 体験乗車



● 屋外建設車両展示



女性レポーター による現場訪問

特集 ④

今回は、「片貝別又発電所新設工事」を前田建設工業(株)北陸支店の西野晴香さん、穴田愛実さんにレポートしていただきました。

第36回 REPORT

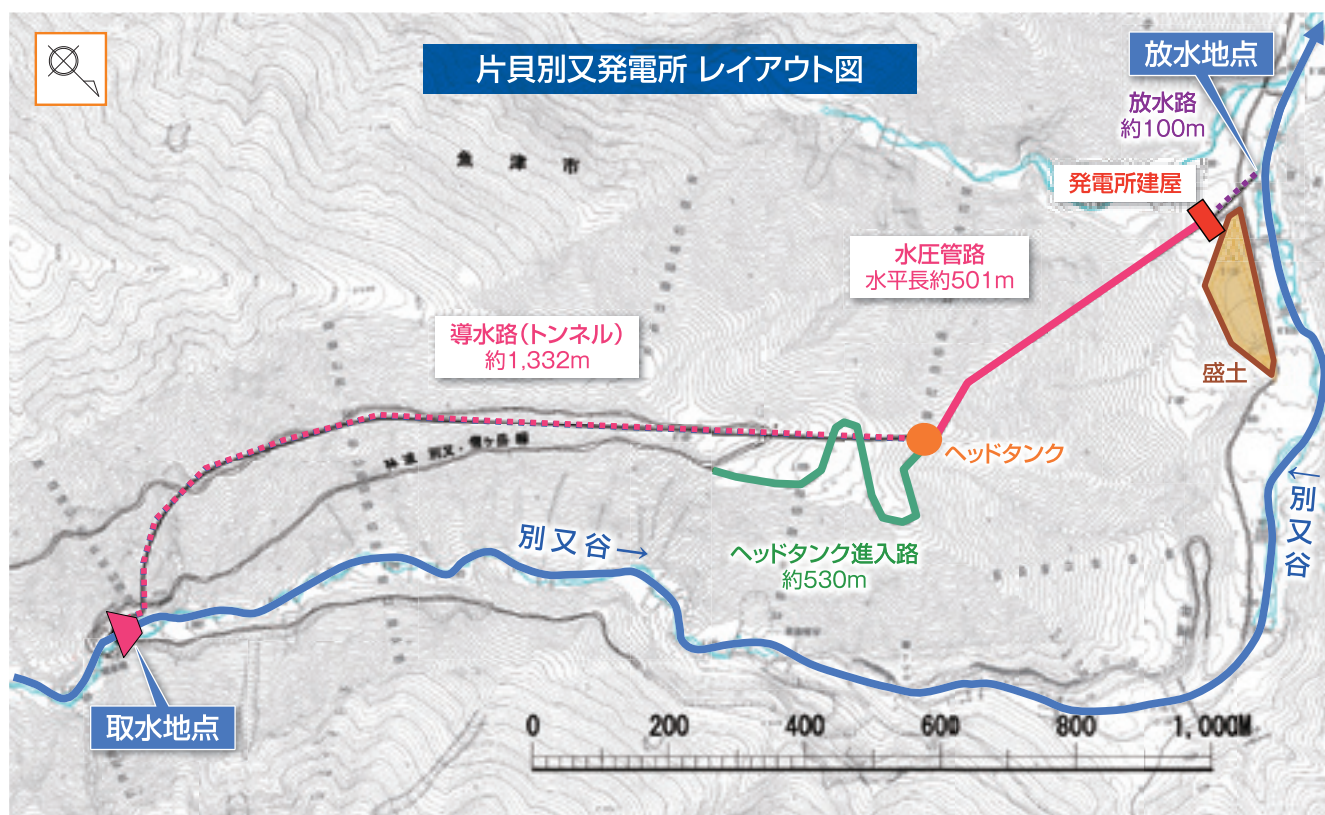
片貝別又発電所新設工事

【前田建設工業(株)北陸支店】



発電所諸元	
水系・河川名	二級河川片貝川水系 別又谷(普通河川)
所在地	富山県魚津市山女字別又地内
集水面積	5.18km ²
取・放水位	(取水位)標高 607.500m (放水位)標高 301.287m
有効落差	297.80m
使用水量	1.80m ³ /s
出力	4,400kW
発電電力量	約1,740万kWh/年
送電線	延長 約2.5km(片貝第二発電所へ連系)

着工年月	平成25年5月
運転開始	平成28年5月(予定)
竣工	平成28年7月(予定)



工事概要

- 工事名称／片貝別又発電所新設工事のうち土木本工事
- 発注者／北陸電力(株)
- 施工者／前田建設工業(株)
- 工事場所／富山県魚津市
- 工期／平成25年4月1日～平成28年7月25日
- 工事概要／水路式水力発電所新設工事
取水ダム 高さ5.5m 堤頂長20.35m
導水路トンネル 延長1,332m
水圧管路 延長501m 他



▲現場事務所にて予習

はじめに

今回私たちが訪問させていただいたのは、富山県魚津市の山間部にある「片貝別又発電所新設工事」の現場です。この工事では、最近見直されつつある自然エネルギーの一つである水力発電所が作られており、発電所建屋、導水路トンネル、貯水槽、水を発電所へ流す水圧管路の基礎など多岐にわたる工事が施工されています。水力発電で一番重要なのはもちろん水です。その点富山県は、山と海が近く急勾配なこと、川には立山連峰の雪解け水が豊富なこと、この2点の条件がそろうため水力発電には最高の環境なのだそう

です。キロ離れており、移動に20分もかかる場所にあります。曲がりくねった林道の片脇は、車内から窓越しに覗き込むだけでも緊張するほどの断崖で、車一台がやっと通れる道幅しかありません。見通しの悪いカーブも多く、東福所長もクラクションを鳴らしながら注意深く運転していらっしゃいました。雨天になれば、土砂崩れや落石が発生することもあるそうです。道路わきに転がった直径30センチを超える岩や、むき出しになった山肌を見ながら、自然の厳しさや壮大さを感じる現場だとおっしゃっていました。

林道を登りきると、頑丈そうなコンクリートの構造物が姿を現しました。片貝川から水を集める取水施設です。私たちが見学させていただいた時にはすでに95%程が完成していましたが、まだ作業は続いておりたくさんの作業員の方が行かかっていました。取水堰は一度に作るのではなく、左岸側と右岸側に分けて、片方ずつ施工されたそうです。そうすることで本来の川の流れを守りつつ、なおかつ水中での施工が少なくなるので作業員の安全性も高まるとのことでした。取水堰を経て次に水が向かうのは、取水口と河川維持放水設備です。ここで、発電に必要な水は取水口へ、それ以外の水は河川維持放

水設備を通して川へ戻します。取水口にはさらに水の取りすぎを防ぐための穴が4つあけられており、いかに自然を第一に考えながらの取水かということが感じられました。

取水施設から次の設備の工事場所へ車を走らせる道中、今まで通ってきた林道とは違う新しい道路を通ったことに気が付きました。所長によると、この道路は工事後は管理用道路として使われるもので、大きなトラックもすれ違えるほどの幅をもつ立派な2車線道路でした。しかしながら地形上どうしても傾斜がある道路になるので、天候の悪い日には雨が川のようにって道路を流れると言っておられました。

その道路を抜けると見えてくるのが、上流で集めた水が流れる導水路トンネル出口と、その水を一時的に貯めるヘッドタンクです。通常の山岳トンネル工事では、掘削後すぐにコンクリートを吹き付けていくNATMが主流だそうなのですが、この導水路トンネルは、掘削断面が小さく機械が入らないなどの理由により、その工法は使えなかったそうです。そのため、火薬による掘削後、鋼製支保工を立てて木製の矢板を送り、さらに掘削とその繰り返しを行っていく矢板工法と呼ばれる昔ながらの工法に頼ることになったそうです。また当



▲取水堰・取水ゲート



▲現場でのインタビュー



▲打ち終わったばかりのコンクリート



▲導水路トンネル貫通状況



▲2年目の社員へのインタビュー



▲発電所建屋内

初の計画では、一方向から掘削される予定だった導水路トンネルですが、安定して掘削できる地質が4分の1程度しかなく、山が崩れやすい地質であったことから、まずは掘削のための準備工事を行うことになりました。その準備工事のためにトンネル掘削は1シーズン見送られ、トンネル掘削時は2交代制や3交代制での作業、さらには一方向からの予定だった掘削を両サイドからに変更することで、工程を取り戻すことができたそうです。そんな大変な工期の中、完成したトンネルに私たちも懐中電灯をもって入らせていただきました。はしごをつたって中へ入ってみるとコンクリートが打ちっ放しになっていて、ひんやりと感じました。通常、コンクリートは打ち方が丁寧でないとう仕上がりに線が浮き出たりムラがでたりするそうですが、導水路トンネルの壁は見事に艶々に仕上がっていました。両サイドから掘削されたこのトンネルですが、一番気をつかったのはトンネルが繋がる時だったと言います。実は屈折するトンネルの方が繋げやすいそうなのですが、こちらのトンネルは、全長約1300mのほぼ直線のトンネルだったため、測量を担当した山本さんは、繋がるまでとても不安だったとおっしゃっていました。無事に貫通したときにはかなりほっと

されたそうで、東福所長も素晴らしいと太鼓判のトンネルが完成しました。さて導水路を挟んで、取水口の反対側には、一時的に水を貯めるヘッドタンクがあります。ヘッドタンクからは発電所に繋がっている水圧管路が急斜面をつたって様子が見えました。私たちが見学した日は薄く霧がかかっていたため、水圧管路も30m程先までしか見えなかったのですが、設置場所の海拔は約600mの高台で周囲が開けているため、天気の良い日は富山湾越しに能登半島まで一望できるそうです。この水圧管路は簡単にいうと、ヘッドタンクに貯めた川の水を下部の発電所まで落とすための大きな管路です。片貝発電所では、ヘッドタンクから発電所までの約300mの落差によって、発電量を効率よく増大することができます。この水圧管路の斜度は最大で41度あり、約35度といわれるスキージャンプ台の斜度よりも急なのだそうです。例えるならば、東京タワーのてっぺんからスキージャンプ台を滑るように勢いよく水が流れてくることになります。実際に水圧管路のてっぺんから下をのぞきこんでみましたが、足がすくむほどの急傾斜でした。見学した際は、水圧管路付近はすでに完成している状態でしたが、もともとは木

の生い茂る山を切り開きながら作られたそうです。現場では、急斜面での作業効率を上げるために、資材運搬用のケーブルクレーンを設置して作業されました。ケーブルクレーンのタワーは、発電所側は27m、ヘッドタンク側は54mもの高さがあったそうです。高低差300m、水平距離にして500mの間を最大4.5tもの資材が運ばれている様子は、想像するだけでも圧倒されます。モルタルを吹付けてコンクリートを打つという作業を、この急傾斜で行ったのかと思うと、作業員の方々の努力のたまものだなと感じました。工事中は、資材用のケーブルクレーンとは別に、作業員が移動するためのモノレールが水圧管路の横に設置されていました。このモノレールは、4～5人乗りで椅子がついていますが、なにしろ傾斜がすごいので慣れるまでは乗っている間もゆったりしていられる状態ではなかったそうです。設置前はヘッドタンクまで登山で1時間以上かかっていたものが、モノレールだと10分に短縮されたことから、時間の点でも体力の点でもモノレールの利点がよくわかりました。このように現場内での移動にも時間を要しますが、実は現場事務所はさらに山のふもとにあるため、お昼の休憩に戻るのも

一苦労です。その時間と体力の口スを減らすために、なんと東福所長自ら現場にいる各職員にお弁当を届けてまわることがあるそうです。「現場・現実・現物」の三現主義を大切にしておられる所長は、事務所で話だけでは伝わりにくいことでも、現場で実際に確認することによって、よりの確かな指示を出せるとおっしゃられていました。こまめな声掛けをすることによって、現場の状況を知ることができ、作業員の気も引き締まるのだそうです。所長ご自身もお忙しい中で、現場のことはもちろん、職員への配慮も忘れない姿勢に尊敬の念を感じました。さて、水圧管路の先には発電所建屋があります。発電所建屋の建設はすでに完成しており、私たちが見学した際は発注者の北陸電力さんが発電機の設置をされているところでした。この発電機によって、いよいよ川の水から私たちが使う電気が生まれます。水力発電では、流れる水の力を利用して水車を回し、電気を発電します。水力発電の発電出力は、「重力加速度×流量×落差×効率」で決まるそうです。重力加速度とは水が流れる勢いのこと、流量は水圧管路を流れてくる水の量のこと、落差は流れ始める地点の高低差、効率とは発電に至

る前に消費されるエネルギーを差し引いた電力量を差します。片貝発電所では出力4400kWの電力を発電することになりますが、これは一般家庭4800世帯の年間使用電力量に相当するそうです。水力発電は、一度施設を作ってしまうと水以外を必要としないので、コストがかからず環境にも優しい発電方法です。原子力発電の安全性が問い直され、火力発電の燃料が高騰化していく中、再生可能エネルギー、特にこの現場で造っているような小規模水力発電所は全国に候補地が多く、これからエネルギーの担い手になるのだそうです。発電所内の発電機を通った水はいよいよ水力発電の最後のパートへすすみます。ここで水力発電初心者の私たちが疑問に思ったのは、水圧管路から落ちた川の水は発電機を通ったあと、どこへいくのか？ということです。答えは、「川に戻す」です。発電所建屋から片貝川に向けて放水用のトンネルが掘られていて、そこから川へ戻すのだそうです。その放水路トンネルは、高さ約1.5m、幅約1.7mで、大人が腰かがめて立てるほど、両手を広げて少し余裕があるほどの大きさでした。発電量という、何かを消費した動力で電気を作るといったイメージでしたが、水力発

電の場合は、川の水を一旦借りて電気を起こしたあと、また川に返すので、限りなくエコな方法だと感じました。**最後に** 工期が迫るなか、現場を案内していただいた東福所長をはじめ、現場の皆様方にお礼を申し上げます。今回の見学を通して、支店の業務では知りえることのなかった現場の状況を知ることができ、改めて土木工事の大変さを知りました。自然相手に悪天候や土砂崩れなど危険な経験をされながら、あと一歩で完成というところまでこられたわけですが、皆様にお話を伺ってみると、苦労とともに笑顔も見られました。中には「苦労があったからこそ、今の達成感はひとしお。完成後数年したら、また見に来てみたい」とおっしゃれる職員のかたもおられました。完成まであと少し。安全に最後まで工事がすすむことを祈っております。今回は、お忙しいところ本当にありがとうございました。

レポーター
前田建設工業(株)北陸支店
西野 晴香(安全環境部)
穴田 愛実(土木部)



▲導水路トンネル内にて



▲水圧管路(中間部)



▲水力発電所の終点・放水口



▲現場の皆さんありがとうございました。御安全に！

素敵な女性

「建設コンサルタントで女性の長所を発揮する」

Q. 土木の道を志したきっかけは何ですか。

A. 中学校を卒業した後、私は高等専門学校(高専)に入学して土木工学を学びました。「なぜ土木の道へ進んだのか?」と改めて考えると、単純に高専へ入学したかったからだと思います。高専のホームページを見た中学生の私は、トプエンジニアになれる・手に職がつく・国立大学へ編入できるという安易な考えで、良くも悪くも高専というちょっと変わった道を選びました。これが、私の土木人生のスタート地点です。

初めは土木に全く興味がありませんでしたが、高専で土木工学を学んでいるうちに土木の魅力に引き込まれていきました。私が最も好きだった科目は“コンクリート工学”でした。コンクリートを練り混ぜるときに発生する匂いが好きだった私は、自宅の花壇のひび割れをセメントで補修することが趣味の1つでした。コンクリートのひび割れの原因に興味を持った私は、セメント結合材の主要な水和物の組成とひび割れの関係について詳しく学びたいと思い、このことについて研究している教授のいる大学へ編入しました。

Q. 建設コンサルタントのお仕事を選んだ理由をお聞かせください。

A. 就職活動を始めた当初、私は民間企業であるゼネコンと建設コンサルタントに興味を持っていました。自分で施工または設計した施設が人々に使われるということに対して憧れを持っていたからです。ただ、不安な点もありました。その1つは、女性が土木業界でやっているのか?ということでした。途中で土木業界への就職を断念して、別の道へ進もうと考えたこともありましたが、大学の先生からのアドバイスを受けて土木業界へ就職する決心をしました。

次に、ゼネコンと建設コンサルタントの

どちらに就職しようかと悩みました。最初は、大好きなコンクリートを現場で実際に施工できるゼネコンに興味がありました。しかし、外で1日中指示を出すような体力に自信がなかったため、最終的には建設コンサルタントを選ぶことになりました。

このように、私は消極的な理由で建設コンサルタントを就職先を選びましたが、今は選んで良かったと思っています。

Q. 今まで携わった業務について、学んだことや感じたことを教えてください。

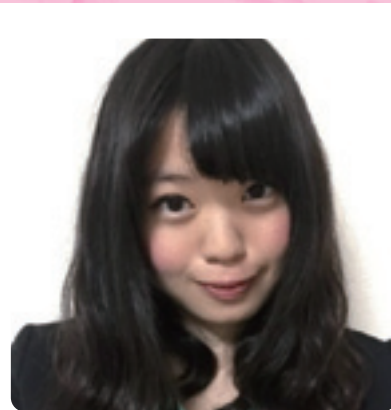
A. 就職してからの1年間で、業務を通じて学んだことは大きく3つあります。

1つ目は、仕事を始めるとき、作業をいきなり開始するのではなく、最初に仕事全体の流れを確認し、どのように進めていくかという手順を考えることが重要だと感じました。手順をあらかじめ考えることで時間配分を意識しながら仕事を進められるようになりました。

2つ目は、疑問が生じたとき、1) 指針類の内容を自分で調べ、2) 自分なりにその疑問に対する回答を用意し、3) 考えた回答を上司に相談して疑問を解消するという順序で、疑問を解決していくことが重要だと学びました。そうすることで、自分で考えて解決する能力が身に付くことに気づきました。

3つ目は、人脈を形成することの大切さを学びました。現在、複数のメーカーが研究した内容を技術資料に取りまとめる業務に携わっています。単なる設計・計画以外の業務を経験することで幅広い知識を習得し、さらに社外の人と交流することで人脈を形成していきたいと思っています。

この他に、新卒採用活動にも参加しました。20代の若手主体で就職情報サイトへ掲載する会社紹介ページや会社説明用スライドなど



オリジナル設計株式会社
新潟事務所 技術一課
福田 恵理
Eri Hukuda

今回は、オリジナル設計株式会社の
新潟事務所に勤務され
技術一課でご活躍されている
福田恵理さんにお話を伺いました。

も作成しました。入社して2年目でこのような活動に参加させてもらえるとは思っていませんでした。

Q. 建設技術者を志す女子学生に、一言メッセージをお願いします。

A. 学生時代に土木を学んでいたから土木の道へ進むことは普通のことです。ただ、“土木をやりたい”という気持ちがなければ長続きしないということも現実です。まだ1年半の経験ですが、少なくとも女性は建設コンサルタントで働きやすいと感じました。なぜなら、女性はコミュニケーション能力が高く、周囲と協調して仕事を進めるのが得意なので、段取りや調整に長けていると男性たちからも高く評価されているからです。“土木をやりたい”という気持ちが強く、女性の長所を発揮できれば土木業界でも活躍できると思います。たくさん悩んで自分がやりたいことを見つけてください。



合同企業説明会で
会社概要を説明中

写真中央が福田さん

「自分の意志も自信も何もない、暗くて地味な女の子」

これが昔の私です。学校の先生を目指している普通的女子大生。その当時の私に、今の私の現状を教えても全く信じないでしょう。

転機があったのは大学3年生の冬頃。あまりにも視野が狭く経験も浅いまま、本当にこのまま教師になって生徒に何を伝えられるのだろうか?と疑問を抱くようになりました。そんな時期に出会ったのが、私が勤めている「したみちオフィス株式会社」の現在の社長、新潟ガールズ集団Lily&Marry'Sの代表である今井美穂さんでした。

地域活性化を目指すガールズ集団を立ち上げ、地元ならではの魅力を女性目線で再発見し自ら発信していく女子を育てる。そんな今井さんの話を聞いて衝撃を受けました。私と年齢もあまり変わらない女性がここまで「地域や人」のことを想って活動をしているなんて。しかも自ら団体を立ち上げ、道を切り開いている力強い姿をみて、自分との

違いに落ち込むと同時に、興味も持きました。私もこんなふうな、自分から誰かのために動ける人間になりたいと思ったのです。

そして何より、「そのままでもいいの?」と真剣に向き合ってくれる、したみちオフィスの社員やLily&Marry'Sのメンバーに触れて、こんなに自分の為に本気で接してくれる人たちがいる事が本当に嬉しくて、感謝の気持ちでいっぱいでした。今の私にとって家族のように大切な仲間です。仲間を守りたいという気持ちは、より大きな原動力になる。そう気づけたことが、私自身が変わった瞬間でした。

あれから3年たった今、したみちオフィスの芸能事業部の代表として、モデル・タレントの育成も行っています。技術を教えるだけでなく、今までの経験を後輩たちにも伝えていきます。周りには、教師とモデルなんて正反対の人生だね、なんて言われることも多いですが、私の中では何も変わらないのです。自分の体験したことを伝え、少しでもその人がいい方

向に進むよう全力でぶつかる。これがともと私の目指していた「教える」という仕事だと思っています。

教える事を始めたとはいえ、まだまだ私自身が学ばなければ!これから更に経験を重ねるために新たな挑戦をしたいと思い、ミス・アース・ジャパンを受けました。出会いがなければ、この大会を受けることすらありませんでした。私の中の小さな変化が自信となり芯となり、私に挑戦するきっかけを与えてくれました。そして、日本大会で優勝出来たのは今までの経験があったからです。

昔の私では想像できないような自分になることが出来たのだから、誰にでも変わるチャンスはあるはず。ほんの小さな気持ちの変化から一歩動いたことで、出会える人達がいて人生を変えるきっかけになる。それをキャッチするかどうかは自分次第ですよ。

12月のミス・アース世界大会でも今までの経験を全力で発揮するとともに、さらにアンテナをはって貴重な体験からたくさん吸収していきます!

エッセイ ESSAY

『何も無かった私から、2015ミス・アース・ジャパンになるまで』



2015ミス・アース・ジャパン(日本代表)
地域活性化モデル
山田 彩乃
Ayano Yamada



ミス・アースとは2001年以来毎年開催されている、世界4大ミスコンテストの1つです。コンセプトは大会を通して人々の環境保全に対する意識を促進すること。それぞれの国の代表が地球環境問題を訴え、人々の環境保全に対する意識の向上を促すために活動します。現在、参加国は90カ国を超え、まさに「地球」規模の「地球」のための「美」のコンペティションです。

「川に寄り添う暮らし」



地域情報誌『街角こんぼす』
編集長

西村 純子 Junko Nishimura

新潟県の新発田市という小さな地方都市で、地域情報誌を発行しています。新発田市は、町並みの中に城や武家屋敷などの文化遺産が点在し、城下町特有の入り組んだ路地を辿れば老舗の酒蔵や和菓子店にも出会える楽しさがある町です。そんな町で暮らす私のいちばんの楽しみは、市街地を縫うように

流れる川べりを散策すること。この川辺の風景は市民の努力によって再生したものです。かつては洗い物をしたり、生け簀を作って鯉を飼ったり、夏には子どもたちが水遊びに興じるなど人々の暮らしに寄り添っていた川ですが、家庭から出る生活雑排水などによっていつしか水は汚れ、魚は姿を消し、ゴミが目立つようになりました。そんな状況を憂い、「かつてのような清流を取り戻し、魅力的な川にしよう」と川の流れと環境を守る活動が始められました。小学校と連携してメダカやザリガニなどの生き物を調査したり、川の護岸に柵を設置して市の花である“アヤメ”を植える活動を行ったり。今では、開花時期になると、あちこちで水面に映える美しいアヤメが私たちを楽しませてくれるようになりました。そして、この活動には思わぬ副産物もありました。一つは川に魚が戻ってきたこと。もう一つは、アヤメの根元にカルガモが卵を産んだことです。卵はその後無事に孵化し、母鳥にくっ

いて泳ぐ愛らしいカルガモ親子の姿が見られるようになりました。魚が生息するようになったことで、サギや渡り鳥も飛来するようになりました。魚や鳥の姿が見られると、それだけで豊かな気持ちになり、川辺を歩いてみたくなります。住民同士の会話も生まれ、温かなふれあいの時間を川が育んでくれるようです。こうしたささやかな日常が楽しくなるような取り組みが、地域の魅力を醸成してゆくのではないかと感じています。



ゆるたいむす

「目標に向かって迷走中」



ケアプラン あおば
代表

石本 祐子 Yuuko Ishimoto

私は介護保険に関する仕事をさせていただいています。日々感じるのは、90代でもパワフルで素敵な方が多い事。「私の方が元気をいただいているのでは?」と思う事もしばしばです。

私もあと2年で50代に突入します。健康でTシャツとジーンズが似合う素敵な50代になる事が目標なのですが…現実足ダボダボの服しか着れない体型。そのため年がら年中、ダイエットが私の目標に掲げられています。増えるダイエット本とエクササイズDVD。なのに減らない体重。夫からも呆れられています。自覚はあるんです…

「よし!女子力アップだ!」と、性懲りもなく最近また購入したエイジレス美女の秘訣なる本によると、美容や健康に遺伝子が関係する割合は30%だけ。あとの70%は、その人の食生活や運動や睡眠、ストレスなどの生活習慣因子によるものが原因だと書いてありました。起床時の心かげ、食事、睡眠等「日常生活の中で自分の体質に合った美容法や

健康に良い生活を継続している」ことが、エイジレス美女になる秘訣だそうです。「食べる事、お酒を飲む事、ドラドラする事大好き!」な私は、とても女子力がアップするような生活を送っているとは言えません。私が夢みる素敵な50代になるためには、「仕事のストレスが…」「美味しいお酒とお料理を食べる事が一番幸せ!」とか言っている場合ではなく、もう少し努力が必要そうです。

これからハッピーできらめくライフスタイルで過ごせるように、無理せずひとつずつ実行です!でもやっぱりお酒を飲んでいる時がハッピーな私…暫くは、私の目標からダイエットは外せそうにありません。まずはダイエット本とエクササイズDVDの整理から始めてみようと思うこの頃です。

「年齢不詳」



フリーインストラクター

村山由利子 Yuriko Murayama

気が付けば人生の半分以上の年月をスポーツクラブのスタジオでインストラクターをさせていただいております。続けてこられたのは、いつも参加いただいている会員の皆さんのおかげです。感謝に堪えない「会員の皆さん」のお話します。

私が担当するスタジオでのクラスは、動き

の組み合わせを覚えながら音楽に合わせて運動する内容のクラスが殆どですが、長く参加いただいている方々は「見た目年齢」・「体内年齢」・「脳年齢」・「精神年齢」等々が、推測する実年齢と比べてかなり若いと感じます。そう、「年齢不詳」の皆さんなのです。

「年齢不詳」の皆さんは、一般的には中年や年配と言われる年齢層の方も、運動強度・難易度とも少し高めの中上級者のクラスを難無く楽しんでおられます。他にも運動する際のウェアをおしゃれに楽しむ、年齢が離れている会員の方とも同じ空間で同じ運動をする友人として会話を楽しむなど、スポーツクラブに来ることが生活の中でルーティンとなっていて、様々な場面でそれぞれの方法で楽しむことに長けた皆さんは、本当に「年齢不詳」の方が多いようです。

長く運動を続けておられる方ばかりではなく、スタジオ

レッスンを始めたばかりの70歳代・80歳代の方であっても、続けて参加いただいていると運動能力が向上してくるのが分かります。それぞれのペースでそれぞれの楽しみ方を覚え、「年齢不詳」の仲間入りをされます。習慣としてできる運動を始めるのは、何歳になっても遅くないと実証してくださっています。

私の役目は皆さんが飽きることなく続けられるクラスを提供することであり、目標は皆さんと一緒に「年齢不詳」と思われる心技体を持ち続けることです。

(編集部後記:村山インストラクターはJOYFIT新潟青山・JOYFIT新潟東区役所等で、レッスンをご担当されています。)



「18.44の対決」



㈱アルビレックスベースボールクラブ
編成部

辻 和宏 Kazuhiro Tsuji

18.44m。野球でいう投手と打者との1つの対決が行われる距離です。ひと度、打球が放たれると、走者と野手との競争に切り替わります。投・捕・打・走。野球は他の競技にないコーディネーション能力を必要とするスポーツです。その魅力と楽しさを多くの子どもたちに伝えたい。そんな思いで現在私は、新潟アルビレックスBCに勤務しております。大学2年で選手としての道を断念し、主務

としてチームのマネジメントに没頭したのち、プロ球界への憧れから、卒業後、読売巨人軍へ入社しました。そこでは、日本プロ球界に欠けていた普及・振興・育成といった、アカデミー事業「ジャイアンツアカデミー」の立ち上げに従事しました。

日本でこれだけ人気のあるスポーツであるのに指導法が球界で確立、共有されていない。他スポーツでは当たり前のように共有されているのに、よく考えると不思議なことです。キューバやアメリカの育成ドリルを参考として、元プロの理論も取り入れながら、より普遍的な「誰でも子どもの成長に合わせて指導できる」プログラムを作りました。6年かけて野球指導教本という形で、導入から応用までの1つの形(ノウハウ)ができました。

その後、現場(選手の近く)の仕事や球団を支える営業にも携わりたいという思いから、現在の球団へ移りました。それというのも、現場と普及そして独立リーグ経営を支えるスポンサー営業に携わることで、様々な視点から野球を見る、そして普及事業を見直すことができると考えたからです。独立リーグ球団で



すので、実際に私はスポンサー営業を始め、チーム編成、そしてアカデミー事業「野球塾」での指導も行っており、様々な展開を試みております。

新潟アルビレックスBCはBCリーグに属する球団です。NPB球団の規模とは格段の差がありますが、少しずつプロ球団として階段を上っています。「地域と地域の子どものために」:BCリーグが掲げている憲章です。地域活性のために1人でも多くの方々に応援していただける球団となるよう、独立リーグだからできる、地域密着だからこそ取り組みなければならぬ、これからの野球界を担う子どもたちに夢を与えるために、野球の普及に「地方から」選手と一緒に尽力していきます。

そして、私と同じ思いで普及に取り組み、自身の夢も叶えるべく、NPBを目指す若者たちの全力の泥臭い『18.44の対決』を1人でも多くの子供たちに見てもらえるよう努めています。

MY PRIVATE TIME

私のプライベートタイム。

「転勤が育む プライベートタイム」



鉄建建設(株) 北陸支店
支店長
石丸 和也
Kazuya Ishimaru

今年の4月に東京の本社より新潟に赴任致しました。昭和56年入社で北陸支店に配属されて管内(当時…新潟・富山・石川の3県)の土木現場を9年間転々としていました。	かったことと、小生も小・中・高と野球をやってきたこともあり、発注者あるいは他社の現場の方との親睦野球大会、また、各現場の近隣の朝野球などに参加させてもらい、若かったこともあり	たら今度はアイアンがシャンクするようになりとスイングが減茶苦茶になり、教わっているのに毎日喧嘩しながらの練習でした。
平成2年から、新潟の支店を本拠地として開発営業をやることになり、約13年間宅地開発等の不動産業務に従事しました。不動産に従事していたためか、平成15年に突然、全国の不良資産の売却・管理等のために本社に転勤になり約12年かけて整理が終わり、ほっとするのも束の間、またまた突然(今回は、まさに晴天の霹靂!)の転勤で新潟に戻ってまいりました。	ますが疲れも感じず楽しんで野球ばかりやっていたことを懐かしく思い出します。(上手かったかどうかはご想像におまかせします!)	でも、その甲斐もあって次のシーズン後半には100を切れるようになり、ゴルフが面白くなり、休日にプライベートでもよく行くようになりました。(その時の同僚に感謝かな?)
赴任して半年が経ちましたが、土木職でありながら勤務年数の約75%にあたる期間を不動産業務に従事してきた小生としては、毎日が本業(土木職)復帰へのリハビリかつ勉強の日々であり、これからも続きます。	次に、新潟市での13年間ですが、私たちの業界も徐々に土・日が休めるようになり、また営業職であったこともありゴルフが必然的に増えてきました。それまでゴルフは年に一度実家に帰ったときに親父と一緒にやる程度でスコアも120位だったと思います。先程紹介させていただいたように、不動産業務が主でしたので不動産会社並びにハウスメーカーとのお付き合いが多く、業務でのゴルフは火曜日か水曜日がほとんどだったように思います。大きな声では言えませんが、プレー代だけですむことは皆無でした。	次の東京での12年間ですが、本社勤務ということと経済情勢も変化し、昔のような業者間のゴルフも年々減ってきました。せっかくゴルフが好きになったのになかなかプライベートでも行く機会がなくなり、東京での最後の3年間では10回ぐらいいしか行ってないと思います。では、12年間のプライベートタイムは何をやっていたのか?というところあまり言いたくはないですが、ギャンブル(パチンコ)にハマってしまいました。
自己紹介が長くなりましたが、私のプライベートタイムの過ごし方はこの異動を節目に少しずつ変化してきているので、紹介させていただきたいと思います。	ゴルフをやられる皆さんも経験済みでしょうが、このままでは小生の懐は破産すると思い、ある時期に同僚(小生より少し上手い人)と一緒に、半年間、毎日夜に猛練習をしました。まず、ドライバーがスライス系だったのでドロー系が打てるように根本的にスイングを変え、ある程度ドローが打てるようになって	以前からそれなりにやってはいましたが、他に趣味が見つけれずついついハマってしまいました。その結果、女房には言えない〇〇を作っていました。(〇〇は、ギャンブルだけで作ったわけではないのであしからず…)
入社して9年間は、なかなか休みがとれない時代でしたので、たまの休みには野球(ソフトボールが主)をすることが多かったと思います。現場の所長(9人の所長)に野球が好きな方が多		4月に新潟に赴任して半年が経ちゴルフの機会も増えたので、ゴルフを核に3年前から強制的にやられている畑仕事も積極的にやっていきたいと思っています。

事務局だより

平成27年度上半期の主な支部活動報告

・関係機関や会員の皆様からご協力をいただき以下の活動を展開してきました。

北陸支部歓送迎会の開催

開催日／平成27年4月27日(月)
会 場／ホテルオークラ新潟

公共工事の諸課題に関する意見交換会

開催日／平成27年6月1日(月)
会 場／ANAクラウンプラザホテル新潟
内 容／ゆう「特集号」
平成27年8月20日発行に内容を掲載

北陸支部定時総会の開催

開催日／平成27年6月1日(月)
会 場／ANAクラウンプラザホテル新潟
内 容／ゆう「特集号」
平成27年8月20日発行に内容を掲載

「土木の日」親子工事見学会

実施日／長岡班
平成27年7月28日(火)
見学場所／長岡維持出張所除雪ステーション・三国川ダムを見学(参加者19名)
実施日／新潟班
平成27年7月29日(水)
見学場所／船で新潟西港見学、水利実験場見学(参加者26名)
内 容／建設業の社会的使命や社会資本整備の必要性を広く知っていただくために、夏休み期間中に小学校高学年の児童とその保護者の方を対象に、見学会を実施しました。



北陸電力への本部役員挨拶

開催日／平成27年7月31日(金)
内 容／宮本土本部長をはじめ土木本部役員と守田支部長による、北陸電力への挨拶を行いました。久和会長、金井社長のご出席をいただき情報交換を行いました。

建設業の長期ビジョンと指定公共機関に関する説明会の開催

開催日／平成27年8月31日(月) 会場／新潟県建設会館
内 容／将来に向けての建設業の進化と再生するための道筋を提示した「建設業の長期ビジョン」について本部役員より説明を受け、内閣総理大臣より、災害対策基本法上の指定を受けた指定公共機関の役割を本部災害対策委員より説明を受けました。

東日本高速道路(株)新潟支社との意見交換会

開催日／平成27年9月16日(水) 内容／本誌P10に掲載

市民現場見学会

開催日／平成27年
9月29日(火)
見学場所／北陸電力(株)
富山新港火力発電所
LNG1号機建設工事・
新湊大橋
金沢大学生対象



開催日／平成27年
10月22日(木)
見学場所／吉津トンネル・
白根ポンプ場
長岡高専学生対象



BACK STAGE 編集後記

当号の編集を行っている時期に関東・東北豪雨災害が発生しました。この度の災害において亡くなられた方、被災された方にお悔やみとお見舞い申し上げます。
北陸地域においても、平成10年新潟・平成16年新潟福島・平成23年新潟福島と水害にみまわれています。「ゲリラ豪雨」「爆弾低気圧」など嘗ては聞かなかった造語もでき巨大で強力なエネルギーを感じてやみません。地震・噴火・水害・土砂災害等々、自然は突如牙をむきます。その時に備えソフトの部分である訓練教育、ハードの部分である社会基盤整備を絶え

間なく充実させていかなければなりません。「もうこれで絶対大丈夫」はありません。
建設産業は、整備し点検し維持修繕を行いながら管々と人々の役に立つ仕事であると感じています。就職内定のニュースを見ながら、4月から新たに建設業に就職する人達が、誇れる仕事であり達成感のある産業であると思っています。広報委員として大学生・高校生、また就職担当の先生方からの意見を参考にしながら広報活動を継続していきたいと考えています。

(大知英信 記)

広報委員会スタッフ

委員長 橋本 成輝(五洋建設)
副委員長 岡崎 豊彦(熊谷組)

委員

昆野 徹也(安藤・間)	石附 裕(植木組)
大知 英信(大 本 組)	吉田 裕之(加賀田組)
垣内 俊彦(鹿島建設)	田中 哲司(五洋建設)
小川 晃市(清水建設)	小林 恵一(銭高組)
和田 茂秋(第一建設工業)	岩佐 一郎(大成建設)
窪田 利晴(東亜建設工業)	津川 圭一(フジタ)
永田 健二(前田建設工業)	福山 清隆(若築建設)

事務局長 本間千代吉(日本建設業連合会北陸支部)

59

2015.12